

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：33918

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K15932

研究課題名(和文)精神科デイケアにおける長期利用者の地域移行のためのプログラム開発に関する研究

研究課題名(英文) Development of a program to transfer long-term users of psychiatric day care to community-based care

研究代表者

田中 敦子(TANAKA, Atsuko)

日本福祉大学・看護学部・助教

研究者番号：70398527

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：精神科デイケアの長期利用の要因を明らかにするため、精神科デイケアの利用者および専門職者を対象に、ストレンクス志向、リカバリー志向の支援について質問紙調査を実施した。ストレンクス志向の支援について、利用者の評価は高いが、長期利用の要因を明らかにすることはできなかった。デイケアの利用目的において、専門職者と利用者間に認識の差が見られ、利用者の希望を常に共有しながら支援を継続していく必要性が示唆された。分析データ数が少ないため、プログラム開発に向けて引き続きデータ収集・分析を続けていくことが必要である。

研究成果の概要(英文)：We conducted a questionnaire survey on strength-oriented and recovery-oriented support for users of psychiatric day care and professionals involved in the care to determine factors affecting the long-term use of psychiatric day care. Analysis of the strength-oriented support shows that users were satisfied with strength-oriented support, but no factors affecting the long-term use of the day care were found. For the purposes of using day care, there were differences in recognition between professionals and users, suggesting the necessity of providing interventions. It is necessary to continue data collection and analysis for program development because of the insufficiency of the number of data to be analyzed.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神科デイケア スtrenクスモデル リカバリー

1. 研究開始当初の背景

精神科デイケア(以下デイケア)は、再入院・再発予防、慢性期患者の居場所、生活リズムの維持などを目的に、精神障害者の退院後の受け皿としての役割を果たしてきた。しかし平成 21 年、厚生労働省は精神障害者の自立を促す目的で漫然とした長期・頻回のデイケア利用の是正を求めた。平成 22 年には診療報酬改定による食事提供加算の廃止、平成 24 年には「疾患別等診療計画加算」が新設するなど、「デイケアは精神病院からの退院や地域移行に必要なサービス」としての位置づけが色濃く反映されている。さらに、1年以上の利用者が75%を超え、全体の過半数が利用3年以上となったこと、デイケアを開始して1年経つと、手段的日常生活動作(IADL)がほぼ一定となるという理由により、平成 26 年年の診療報酬改定では、3年以上の利用者にかかっていた算定限度日数が1年以上の利用者に引き下げられた。退院後のデイケア利用期間が長期になると再入院率防止効果に疑問があるとした研究(吉益, 清原, 2003)や、再入院抑止効果はあるものの、次のステップアップが課題であるとした研究(瀬戸屋, 2010)もある。

こうした状況に対し、デイケアにおいても疾患別・目的別・年代別・病期別・利用期間別のプログラムの実施など様々な試みをしている。昨今の精神障害者の雇用促進の方針により、特に就労に向けてのプログラムや支援が活発である。しかし、厚生労働省の平成 25 年度調査では、精神科デイケア等の利用者の48%が55歳以上であり、長期化、高齢化したデイケア利用者のすべてが就労対象となるわけではない。

ストレングスモデル(Rapp, C.A., Goscha, R.J., 2008)によるケースマネジメントは、病気や欠陥といった「問題」ではなく人間の「可能性や強み」に焦点をあてたりカバリー志向による実践方法で、その目標は、ノーマライゼーションや社会統合という概念に基づき、「可能性の開かれた生活の場」を創造することである。精神科デイケア利用者の地域移行のためには、いかにして「可能性の開かれた生活の場」へと転換していくかが重要である。再入院率や就労率だけでなく、リカバリー志向、ストレングスモデルの視点からデイケアの意義を見直すこと、支援の方策を立てることによってデイケア利用者が望む地域移行・定着へとつながると考えられる。

2. 研究の目的

精神障害者のリカバリー、ストレングスモデルの視点から長期利用の要因を明らかにし、地域移行・定着を橋渡しできる支援プログラムを作成する。

3. 研究の方法

(1)デイケアの長期利用者の特徴および長期利用の要因

方法

精神科に通院する外来患者を対象に実施している精神科デイケア施設に勤務する専門職者とその専門職者が主として担当している利用者を対象に自記式質問紙調査を実施した。調査は、平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月に行った。研究者が説明を行い、専門職者および利用者双方の承諾が得られた対象者にデイケアで実施している(受けている)支援の記入を依頼した。また、デイケア施設の調査票の記入をデイケア管理者に依頼した。

調査内容

利用者の基本情報

- ・基本属性、精神科受診歴、デイケア利用状況

支援内容

- ・ストレングス志向的な態度評価尺度
地域精神保健福祉医療における支援スタッフのストレングス志向の支援態度を測定するために開発された尺度である(贅川ら, 2012)。19 項目から成り、各項目は 0～3 点の 4 段階で評定される。得点が高いほど支援を実施していることを示す。利用者が評価する尺度は 10 項目からなる。

- ・日本語版リカバリー支援評価尺度

リカバリーのためにメンタルヘルス従事者から受けたサポートの経験を査定するためイギリスで開発され、日本語版は高い内的整合性、ある程度の構造的妥当性、十分な再検査信頼性が確認されている。27 項目からなる 5 段階の評価尺度である。

- ・日本語版リカバリー態度尺度

精神疾患からのリカバリーに向けての態度を評価するためアメリカで開発され、7 項目からなる 5 段階の尺度である(Chiba et al., 2016)。

利用者の機能評価

- ・利用者の機能の全体的評定尺度(GAF)

その人の心理的・社会的・職業的機能の一般的なレベルを 100 点満点で評価する 1 項目からなる尺度である。

専門職者の基本情報

- ・基本属性、職種、精神科経験、デイケア経験、研修経験

調査内容について、専門職者には回答者ごとに封筒に入れたものを返送または研究者に手渡しを依頼した。利用者には、質問紙の内容に不明な点がある場合に備えて研究者が同席し、回答者ごとに封筒に入れたものを研究者が受け取った。

分析方法

得られたデータは、SPSS Statistics Ver.25 を用いて解析した。利用者の基本属性、精神科受診歴、デイケア利用状況についてまとめ、デイケアの利用期間別(3 年未満、3 年以上)の群間比較により長期利用者の特徴を把握した。デイケア専門職者の支援とデイケア利用者の支援の認識との比較を行った。

本研究は、日本福祉大学の「人を対象とす

る研究に関する倫理審査委員会」の審査を受けて実施した。

(2) 支援のプログラム作成・実施・評価

(1)の結果を元に、支援プログラムの対象者、介入方法、アウトカム指標を決定する。支援プログラムを作成し、デイケアで実施、評価を行う。

4. 研究成果

(1) デイケアの長期利用者の特徴および長期利用の要因

調査期間内で研究の協力が得られたのは、7施設で、デイケア利用者は25名(そのうちデイケア通所3年未満の利用者7名、3年以上の利用者18名)、専門職者20名(実人数)であった。尺度の選定および研究協力の承諾を得ることに時間を要した。

デイケア利用者の属性

利用者25名の平均年齢は、 50.3 ± 10.5 歳であった。単身者14名(56%)、同居者は8名(32%)、その他(グループホームなど)3名(12%)であった。主な生活費は、障害年金が16名(64%)、家族の援助9名(36%)、生活保護5名(20%)、就労賃金2名(8%)、貯蓄1名(4%)であった(複数回答)。

利用者の診断名は、統合失調症21名(84%)、気分障害3名(12%)、発達障害1名(4%)であった。入院歴のある利用者は22名(88%)であった。

デイケアの利用状況は、ショートケアとデイケアを併用している者が8名(32%)で最も多かった。デイケア6名(24%)、デイナイトケア7名(28%)であった。通所頻度は、週5~6日が13名(52%)、週3~4日9名(36%)、週1~2日2名(8%)であった。15名(60%)がデイケア通所を続けたいと希望し、卒業したいと答えた者は4名(16%)、どちらでもない6名(24%)であった。

デイケア専門職者の属性

専門職者20名の職種は、看護師8名(40%)、精神保健福祉士8名(40%)、作業療法士3名(15%)、臨床心理士1名(5%)であった。デイケアの平均経験年数は 5.7 ± 4.7 年、精神科の平均経験年数は 15 ± 8.3 年であった。

デイケア利用期間別の特徴

デイケア利用者の属性、精神科受診歴、GAF、デイケア利用状況、利用者版ストレングス志向的な態度尺度、日本語版リカバリー支援評価尺度についてそれぞれデイケア利用期間別(3年未満、3年以上)に²検定、Wilcoxonの順位検定による差の検定を行った。

属性、デイケア利用目的や利用状況、入院歴やGAF、日本語版リカバリー支援評価尺度において有意差はみられなかった。利用者版ストレングス志向的な態度尺度のうち、「スタッフは、あなたのストレングスを活かし伸ばしていく方法を一緒に何かをしながら考えてくれる」の項目において3年以上の

利用者は有意に高い得点を示していた。利用が長期になるほど、支援者である専門職者との関係が構築され、満足感が高いことが考えられたが、日本語版リカバリー支援評価尺度の下位尺度である「関係性」のドメインにおいては、3年未満、3年以上の利用者において有意差はみられなかった。

デイケア利用者と専門職者の認識の比較

デイケアの利用目的について、「生活リズムを整える」と答えた者(複数回答)は、利用者が23名(92%)、専門職者が22名(88%)で最も多い回答であった。「就労準備」と答えた利用者は10名(40%)、専門職者は3名(12%)、「再発予防」と答えた利用者は7名(28%)、専門職者は14名(56%)であった。デイケアの利用目的で利用者と専門職者の認識に有意な差がみられた項目は「再発予防」であった(表1)。専門職者は利用者の現実的な目標設定をしている可能性がある。現実的な支援を行いながらも、利用者の将来的な希望を随時共有する機会がないと、利用者や専門職者の間にズレが生じ、効果的な支援につながらなくなることが考えられる。

表1 利用目的の比較(複数回答)

利用目的	利用者 n=25 (%)	専門職者 n=25 (%)	2	p
生活リズム安定	23(92)	22(88)	0.002	1.000
人付き合い	14(56)	10(40)	3.60	0.085 [†]
居場所	12(48)	17(68)	2.643	0.148
食生活安定	11(44)	6(24)	1.951	0.232
就労準備	10(40)	3(12)	4.751	0.051 [†]
再発予防	7(28)	14(56)	4.601	0.045 [*]
家族と距離をとる	7(28)	4(16)	0.903	0.496
お金使い方を学ぶ	3(12)	0(0)	3.068	0.235
薬飲み方を学ぶ	2(8)	4(16)	0.856	0.417
特定のプログラム参加	8(32)	1(4)	6.327	0.023 [*]

[†]p<0.1、*p<0.05

ストレングス志向的な態度尺度における利用者評価と専門職者の実施度の認識については、ほとんどの項目において利用者が専門職者より高い評価を示していた。有意差がみられた項目は、「スタッフは、あなたがやってみてほしいと言ったことに“いいね”と言ってくれる」(専門職者の対応項目は「本人の病状が不安定になる可能性がある」とあなたが感じた場合でも、本人の挑戦したいという気持ちにまずは肯定的なコメントを返す)、「スタッフはあなたがやりたいことや支援計画と一緒に考え、あなた自身が決められるようにサポートしてくれる」(専門職者の対応項目は「目標設定や支援計画づくりは、本人と共に考え、本人が主体的に選択できるようにサポートする)、「スタッフは、あなたがうまくできたことやできなかったことを聞いてくれて、それを次に生かせるように話を進めてくれる」(専門職者の対応項目は「本人の上手くいった経験も上手くいかなかった経験も、次の活動を行う際に役立つ経験と捉え、本人がそれを活用しやすいように対話

を進める」) などであった。

今回の調査対象者においては、ストレングス志向的な態度で支援がなされており、利用者の満足も高いことが示唆されたが、長期利用や地域移行という点においては課題が明らかにはされていない。デイケアの利用目的において、専門職者と利用者間に認識の差がある項目があり、介入の必要性が示唆されたが、分析データ数が少なく、調査期間を延長してデータ収集・分析を続けていくことが必要である。

(2) 支援のプログラム作成・実施・評価

(1) デイケアの長期利用者の特徴および長期利用の要因を明らかにするため、データ収集を継続中である。結果を明らかにした後、支援プログラムの作成・実施・評価を行う予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 敦子 (TANAKA, Atsuko)
日本福祉大学・看護学部・助教
研究者番号：70398527

(2) 研究分担者

長江 美代子 (NAGAE, Miyoko)
日本福祉大学・看護学部・教授
研究者番号：40418869

服部 希恵 (HATTORI, Kie)
日本福祉大学・看護実践研究センター・
客員研究所員
研究者番号：00310623

寺澤 法弘 (TERAZAWA, Norihiro)
日本福祉大学・社会福祉学部・助教
研究者番号：80548636

(3) 研究協力者

田野 由佳 (TANO, Yuka)

高岡 ともみ (TAKAOKA, Tomomi)